資料

平成31年度（令和元年度） 佐賀市立城南中学校　学校評価結果

1　学校教育目標	2　本年度の重点目標
城南中学校生徒としての誇りをもち，たくましく生きる生徒の育成 ～「城南魂をもち，主体的に学ぶ人」の育成をめざして～	①学習指導方法全般の改善・教職員の資質・能力の向上 ②コミュニティースクールの活性化 ③不登校生徒減少に向けた取組の充実

達成度　A：ほぼ達成できた
　　B：概ね達成できた
　　C：やや不十分である
　　D：不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3　目標・評価

①学習指導方法全般の改善及び教職員の資質・能力の向上

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●志を高める教育	・自らの夢や目標の実現に向けて主体的に学び合う態度を培う教育活動の推進	・自らの夢や目標の実現に向けて進んで学び合うことができていると答える生徒が年次ごとに増加する。（1年次：65%，2年次：75%，3年次85%以上。）	・1年次では，UDやバリアフリーをテーマに自主研修を行い，福祉体験学習で身近なこととしてとらえさせる。また，地域人材を活用した「働く人に学ぶ」で職業観を育む。 ・2年次では，福祉に加えて被災と復興をテーマに熊本自主研修を行い，たくましく生き抜く力を身につけさせる。また，地域と協働で行う「職場体験学習」では，マナー研修等を実施するなど，将来社会に出て実際に働くことを想定して学ばせる。さらに，高校生を招いて「先輩に学ぶ」を実施し，自分の夢や目標を具体的な進路へとつなげて行くよう促す。 ・3年次では，修学旅行を通して，戦争と平和や復興に向かう人間の崇高さなどを実感させ，未来に向けての夢や希望につなげる。また，「高校説明会」や「体験入学」などに向けて進路学習を充実させることで，誇りをもち，たくましく生き抜こうとする意志を高め，自信をもって受験や進学に全力を尽くす態度を培う。	A	・「自らの夢や目標の実現に向けて進んで学び合うことができている」「だいたいできている」と答えた生徒の総計は，1年で83%，2年で87%，3年で87%であった。 ・1年次では，修学旅行を通してUDやバリアフリーについて学び，UDの考え方が活用されている点を探した。帰校してからも，城南中学校をUDの視点で分析を行った。セントルシアで目の不自由な人の自立のための指圧センターの設立のために働かれている黒岩春地先生の講話を聞いたり，車いす体験，アイマスク体験，高齢者疑似体験などの福祉体験活動に取り組んだりすることで、福祉について自分の事として考えさせる手立てを行った。また、English Dayを通して、異文化を理解するとともに世界の人々と共に生きることについても考えさせた。「働く人に学ぶ」では，働くことの喜びや苦労，様々な経験についてのお話を聞くことをとおして、自分の進路について考えるきっかけとなった。 ・2年次では，「熊本自主研修」を通して，熊本の歴史や文化に触れ，被災や復興を体感することができた。また，各自が自分のテーマのもとに調べたことをまとめ，表現することができた。また，地域と協働で行う「職場体験学習」では，マナー研修等を実施するなど，将来社会に出て実際に働くことを想定した学びができた。「先輩に学ぶ」では，高校生の話を聞くことで，自分の夢や目標，進路を具体的に考えるきっかけとなった。 ・3年次では、「神戸・広島」での修学旅行を通して、震災や原爆で被害に遭った建造物を見学したり，話を聞いたりして、その実態を知り平和について考え、平和な世界を作るために一人一人ができることを考えるよい機会になった。また進路学習においては高等学校の仕組みや特色についての見識を広め、自己の適性や将来について考えることができた。	・1年次では、体験的な学習を中心に行った。その際、様々な講師から実際の経験について教えていただけたのは良かった。一方で、学んだ事を自分の生活に関連づけさせるために、テーマを決めてさらに深く調査をしたり，友達と考えを交流たり深めたりといった活動が不足していたように思う。インプットしたことをアウトプットする活動にも力を入れたい。 ・2年次では，「自主研修」において，行先の歴史や文化，産業等について，各自が自分のテーマを設定し，事前学習からまとめ，発表まで主体的な取組となるような手立てを講じたい。進路学習では「職場体験学習」を中心とした取組を計画的に行い、将来の進路に結び付けていきたい。「先輩に学ぶ」は，事前の高校調べに力を入れ，より効果的な学習となるよう，実行委員会の活用をさらに進めたい。 ・3年次では平和学習をテーマに「自主研修」においては復興の神戸を見ることで、震災の恐ろしさや今までの苦労などを知る機会になったが、震災からかなりの月日が経過していたため、復興が進み、ほとんど震災の跡を目のあたりにすることが少なかったようである。学習テーマに合致した研修場所の検討を改めて行っていく必要がある。また、進路学習では、受験に向けての心構えや、受験直前の学習方法を学ぶことで、受験から高校入学後につながる生活、学習両面での取り組み方を考え、改善すべきである。面接指導を通しても、社会人としての礼法や言葉遣いを身につけることが必要である。
	●学力向上	・生徒の基礎学力定着	・12月の県学習状況調査において，正答率60%以上，無回答ゼロの生徒を80%以上とする。	・全教科で『学び合い』やアクティブラーニングを中心とした授業を実施する。また，他教科や他クラスの良い面を取り入れ，活用するために合同授業を実施する。 ・生徒の実態分析をもとに構内研修会や教科部会を実施し，達成に向けて教職員の意識の共有化と実践を図る。	B	・『学び合い』やアクティブラーニングを中心とした授業スタイルに全教科で取り組むことができた。 ・12月の県学習状況調査において，正答率60%以上の教科は1年の国語，英語，2年の国語，数学のみであった。また，全教科で無回答率は低い傾向にあるが，1年社会，数学，理科，英語，2年英語は県平均を上回った。	・県学習状況調査では，記述式の問題に関する正解率が良くない。学び合い活動の中で，表現力や論理的に説明する力を身につける必要があると考えている。そのため，今後も学び合い活動を継続していきたい。また，合同授業を積極的に取り入れ，学校全体としての学習集団の高まりを目指していきたい。
	○生徒指導の充実	・城南魂を身に付けた生徒の育成	・学校評価アンケートにおいて，「相手や場に応じた行動ができている」と回答する生徒の割合を90%以上とする。	・城南魂とは何かについて，生徒・教職員に共通理解を図り，全教育活動を通して時宜を得た適切な個別指導を行う。 ・問題対応だけでなく，開発的生徒指導の観点に立った指導を行う。	B	・「私は相手や場に応じた行動をしている」という問いに対して，「よく当てはまる」44%「だいたい当てはまる」 44%であった。88%の生徒はおおむね相手や場に応じた行動をしていることがわかったが、全く当てはまらないとい割合が1%あった。	・今後も全職員で適切な全体指導や個別指導を継続していく。また、より一層開発的生徒指導に力を入れ、生徒に活躍の場をつくっていきたい。

②コミュニティースクールの活性化

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
学校運営	○情報発信	・HPの更新，学校たよりの発行など広報の充実	・学校行事や生徒の活動の様子，地域との連携の状況を積極的に情報発信し，学校に対する関心を高める。	・HPや学校・学年たよりで積極的に情報発信する。 ・学校たよりを公民館に掲示してもらい，学校の様子などを校区全体に知らせる。 ・地域ボランティアに参加した生徒の様子をHPで積極的に公開して，生徒の活動の様子を見てもらう。	A	・学校だよりの発行回数は例年同様であったが，生徒の活動の様子や行事予定など，保護者が来校しやすいような情報の掲載を増やした。また，定期的なHPの更新，メール配信等細やかな対応ができた。	・学校HPについてURL変更の周知と，生徒，保護者の関心が高い情報や学校生活の状況がより分かる情報を掲載したHPを目指す。 ・学校だよりの公民館などでの掲示は引き続き依頼するとともに，自治会の回覧板などで住民の目に触れるような情報発信を図る。
	○開かれた学校づくり	・城南中学校運営協議会，城南豊夢学園運営協議会の活性化 ・家庭や地域との連携，小中連携の取組の深まり	・地域のニーズや要望をしっかりと踏まえ，地域と共生，協働をめざす。 ・フリー参観デーやPTA総会，その他学校行事への保護者の参加率を60%以上にする。	・CS協議内容を十分に検討し，豊夢学園のプロジェクトを推進し小中連携の充実を図る。 ・学校行事の日程や内容を不断に見直し，保護者の「見てみたい」「参加したい」という意識の高揚につなげる。 ・地域の方から地域行事の宣伝とボランティア募集の場を設定，地域の声を直接生徒に聞かせる。	A	・城南中学校がコミュニティ・スクールを推進していることを周知している保護者は85%と高いが，生徒は65%と低い値であった。「ドリームスクール」や「出前あいさつ運動」等をCSの活動としてさらに充実させる。 ・フリー参観デーの地域の方を含めた参加世帯の割合は60.3%と高い値であり，学校行事等への保護者の参加数は増加している。 ・地域行事のボランティアには生徒は主体的に参加している。ただ，参加生徒の固定化も見られ，幅広く参加できるような工夫が求められる。	・小学校でのコミュニティー・スクールの活動は知っているので，小学校との違いや中学校の活動をさらに意識できるようなアピールをする必要がある。 ・学校行事等は土曜授業を活用して，保護者が参加しやすい日程設定を進めていく。 ・地域行事の一覧を年度当初に配り，生徒が参加できそうな時期を考えさせるなど，見通しを持たせた広報活動を進める。

③不登校生徒減少に向けた取組の充実

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	・自己肯定感を高め，自他を尊重できる生徒の育成	・安心して生活できる学級（土壌）づくりに取り組ませる（1年生） ・自他ともに良いところを認めあえる人間関係の構築に努めさせる（2年生） ・自分の課題を把握し，周囲と切磋琢磨しながら心身共に成長しようという意識をもたせる（3年生） ※各学年，8割以上の生徒が意識できるようにする。	・週1時間の授業の内容を，教科書を主体としたものだけでなく，ｴﾝｶｳﾝﾀｰ的な内容も取り入れながら，生徒一人一人に課題について考えさせるよう実施する。 ・日常生活の中で起こる出来事をとらえて，学級に限らず，学年や全校で自他ともに成長できる集団について考えさせる。 ・人権週間やいじめ・いのちを考える日などを生徒に主体的に企画・運営させるように支援する。	B	・安心して生活できる学級を目指す意識をもたせるところまではできているが，目標には届いていない。（1年生） ・互いに認め合える人間関係の構築に取り組んでおり、生徒全体では向上しようとしている。（2年生） ・自分の進路を見つめ、自己実現に向けて他と切磋琢磨しながら心身共に成長している。（3年生）	・学校では誰でも授業をきちんと受けられることを一番に保障する、という意識をまず全職員がもつ。 ・そのためには、まず生徒同士が互いの存在を無条件に認め合える意識と雰囲気を作る。学校生活のあらゆる場面で差別や偏見を見逃さないように生徒に声をかけ、場合によってはその場でじっくり話して考えさせる。 ・道徳の授業を工夫し、生徒同士が話し合い、意見を交換できるようにする。その際、意見が偏らないように助言をする。
	●いじめ問題への対応	・未然防止・早期発見・早期対応に向けた組織対応	・未然防止のための居場所づくり，絆づくりを行い，いじめゼロを目指す。 ・いじめを見逃さない体制づくりを行い，組織的な対応をする。 ・保護者や関係機関との連携を密にする。	・担任・副担任が連携して，朝の登校指導から下校指導まで，生徒に積極的に関わることで，生徒理解に努める。 ・情報をいち早くキャッチするために定期的な生活アンケートを実施する。 ・生徒指導部会を毎週開催し，生徒の情報交換に努める。 ・SC等，専門性をもつ外部人材と連携を図り，早期対応に努める。	B	・文化発表会や体育大会などで生徒の出番を仕組み、努力したところを承認することで、生徒の自己肯定感や居場所づくりをおこなった。「私はいじめや差別をなくすようにしている」という問いに対して，「よく当てはまる」45%，「だいたい当てはまる」43%であった。 ・その他に、生徒も傍観者にならない取組を仕組みたい。	・生徒の自己肯定感を向上させるために、更に開発的生徒指導の充実をはかりたい。 ・生徒指導部会を毎週開催し、生徒理解に務めたが、更に職員間での情報交換を密にし、早期に対応していきたい。 ・発達障害の生徒に対して適切な指導ができるように、SCから助言を頂くなど、研修を積んでいきたい。
	○不登校生徒への対応	・未然防止・早期発見・早期対応に向けた組織対応	・組織的な教育相談体制を確立し，学校全体で登校できない生徒を相談室へ相談室で学習している生徒を教室へと導いていく。 ・未然防止のために支持的風土づくりを充実させる。 ・保護者と連携を密にし，信頼関係を深める。	・定期的な教育相談アンケートやQUアンケート等を活用する。 ・教育相談室活用の実践・工夫をする。 ・専門性をもつ外部人材を活用した職員研修や生徒講話などを実施する。 ・SCやSSW，サポート相談員や関係機関，地域との連携を強める。	B	・毎月教育相談部会を開き，SC，SSW，サポート相談員，学習支援員，保健室などそれぞれの強みを生かした支援を進めていったり，ケース会議などで関連機関との情報交換を行ったりしたが，不登校生徒や教室復帰生徒の減少には至っていない。 ・SCによる道徳の授業を行ったり，教育相談アンケートや不登校対策チェックシートの活用を行ったりして，未然防止・早期発見に努めた。	・引き続き組織的な教育相談体制を確立していき，それぞれの専門性を生かした支援を進める。 ・相談室登校の生徒に対して，学習支援をしたり，小集団の中での人間関係の取り方などを身に付けさせたりして，教室復帰の手立てを進める。 ・発達障害の生徒に対して、適切な指導が出来るようにSCから助言を頂くなど研修を重ねていきたい。 ・教育相談アンケートや不登校対策チェックシートをより効果的な活用することができるように努める。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

。

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	・校務等の効率化の促進	・各分掌間の連携及び情報共有を図り，効率的な業務への取組を推進する。 ・職員の時間外勤務について1か月当たりの平均を45時間未満とする。	・各分掌の業務内容をより効果的に行えるよう，適正化の観点から見直す。 ・職員が勤務時間と仕事内容にゴールを定め，見通しをもって取り組めるよう意識化を図る。 ・職員間で業務の在り方，見直しについて，アンケートを採ったり，話し合う機会を設けたりする。 ・職員の組織管理や時間管理，健康安全管理を始めとしたマネジメントを着実に行う。	B	・各分掌について見直しをした中で、文化発表会と合唱コンクールについては、ワーキンググループによる検討を行い、来年度からの同日開催に向けての具体的内容や方法について提案を行った。 ・職員の時間外勤務の1ヶ月あたりの平均は43.1時間時間であった。全体的に退庁時間が早くなってきており、目標は達成した。しかし、時間外勤務が80時間を超えている職員数は4月5人、5月6人、6月3人、7月1人、8月0人、9月1人、10月1人、11月1人、12月1人、1月0人であった。4月当初からすると減少してきているが、特に部活動のあり方に関する職員の意識について考えていく必要がある。	・来年度から実施予定の成績二期制による各行事の時期や調整等、スムーズな実施のための検討を行いたい。 ・職員が十分に休養をとることで、活気あふれる職場環境づくりにつながると考えられる。職員が勤務時間と仕事内容にゴールを定め，見通しをもって取り組めるよう声かけを行う。また、職員とのコミュニケーションを取りながら意識改革を促し、解決を図っていきたい。
教育活動	●健康・体つくり	・部活動の奨励と推進 ・部活動の充実と部活動を通した基本的生活習慣の確立	・生徒の自主的，自発的な活動により自己肯定感を高め，人間関係の構築を図る。 ・生徒の心身に疲労を蓄積し，スポーツ傷害の要因とならにように，計画的な練習と休養に努める。	・「佐賀市立中学校に係る部活動の方針」，「本校の部活動の在り方に関する方針」を年度当初に全職員で確認する。 ・生徒の心身，顧問の校内連携，顧問と保護者の連携を深め，よりよい部活動の運営にあたる。	B	・年度当初に部活動の方針について全職員で確認はできたものの、下校時間の徹底や延長練習、入退部の流れなど徹底できていない部分があった。 ・教師間での連係はできているが、もう一歩踏み込み学習面への支援も連係が必要である。	・顧問会を年に2回、4月と代替わりする8月又は9月に再確認をする。 ・下校時刻について、体育委員会と連係して厳守できる手立てをとる。 ・延長練習の申し出様式や入退部届けなど、各種様式をまとめる。
		・基本的な生活・食習慣の定着 ・健康・体づくりに向けての意識化	・生徒自ら健康安全について理解し，関心を深め，自他共に健康な生活を送ることができるようにする。	・性に関する教育では，学年別に，関係機関や地域連携をした講話の実施や発達段階に応じた取り組みを行う。保護者対象の講話の実施。 ・学級活動や家庭科の授業と連携しながら生徒が意識できるようにする。	A	・保健指導を通して健康の大切さの啓発と意識の向上を図ることができた。 ・関係機関と連携して講演を行い、性教育や防煙教育、薬物の害などについて理解を深めることができた。 ・保健だよりや生徒会活動を通して食事や睡眠の大切さを伝えた。	・関係機関と連携した指導を継続し、健康や体づくりの大切さについて理解を深める。 ・保健指導や保健だより、生徒会活動などを通じて健康管理面の啓発を徹底する。

4　本年度のまとめ ・ 次年度の取組

本年度も，すべての項目において，「ほぼ達成できた」「概ね達成できた」と評価でき，全体として良好な教育活動が展開できたと考える。学習面においては，1・2年生の12月佐賀県学習状況調査の結果は昨年より厳しい状況となった。全体的に、理解力はあるが、思考・判断や表現する力において県の正答率より低い結果となっている。今後、表現力や論理的に説明する力を身につけさせる必要がある。校内研究のねらいを明確化し、『学び合い』の考えを取り入れた授業内容の工夫改善を図ることで、学力向上に生かせるような取組としたい。生活面においては、3年生は落ち着き、何事にも積極的に取り組む姿勢が見られたが、1・2年においては、落ち着かない様子が見られることもあった。学校が安心できる場であると生徒が感じられるよう、まず、生徒の自己肯定感を向上させ、開発的生徒指導を進めていきたい。また、すべての学校行事等において生徒のコミュニケーション能力の育成を図り，良好な人間関係を構築させることで不登校の減少につなげたい。
また、コミュニティ・スクールとして10年が経過し、様々な成果をあげてきたが、今後、さらに学校と地域の結びつきを強固にするために、学校行事や生徒の活動の様子，地域との連携の状況を積極的に発信することで学校への関心を高めるとともに、地域のニーズや要望もしっかりとたらえ、地域との共生，協働を目指したい。

●は共通評価項目、○は独自評価項目